

第3回: 大庭の神社と寺、今も残る伝承

今日は大庭にある神社と寺と、それに今も伝承されている伝説をご紹介します。

先に**神社と寺**から始めます。神社は、何ととっても大庭を代表するのは**大庭神社**です。

昔の**大庭村の総鎮守社**ですが、**相模国に十三座ある延喜式内社**の一つとして名を連ねる古い社でもあります。延喜5年(927)にまとめられた延喜式神明帳に記載されていますので、平安時代中頃に既に存在していたというだけでなく、朝廷に認められる権威を持つ神社だったということです。祭神は神皇産霊神(カミムスビノカミ)で、江戸時代になって大庭景親と菅原道真も合祀されました。明治元年の神仏分離までは別当寺は、北隣にある成就院でした。但し、引地川対岸の台谷(だいやと)地区にある熊野神社も古代の大庭神社ではないかとの学説があり、未だにどちらがそうなのか決着がついていません。

次に歴史と結びつくのは、**神明社**です。大庭地区には小系、台谷、城(たて)と3つの神明社があります(“たて”というのは漢字で城と書きます)。一方、大庭は平安時代末期、伊勢神宮の荘園・**大庭御厨の本郷**とされています。専門家は**大庭御厨**の経営や管理と絡んで勧請されたと考えています。

寺院の方は廃寺になった寺も含めて、5寺が地域的にバランスよく分布しています。この中で南北朝時代に開かれた**成就院**が一番古い寺ですが、大庭神社の本家論争と関連して古代から台谷地区にあって、南北朝時代に今の位置に移動してきたという興味ある説もあります。



大庭神社

次に伝説ですが、大庭には**舟地藏伝説**という第1級の伝説があります。

内容は、北条早雲軍が大庭城を攻撃した際、城の前面と左右は一面の沼であった。攻略しあぐねた北条軍の武将達は、軍議を重ねましたが、いたずらに対陣の日が過ぎていった。ある日、城の対岸の稻荷(小字名)でダンゴを売っていた老婆に、北条方の武将の一人がどうしたらいいものかと相談したところ、「わけはありません。堰を切れれば水は干上がります」と堰(せき)の場所まで簡単に教えてくれました。喜んだ武将は、大事がもれるのを恐れ、老婆を斬り殺し、その夜

のうちに堰を壊したので、城の周囲に満々と湛（た）えられていた水は、すっかり引いてしまいました。北条勢の正面からの総攻撃により、さしもの大庭城も落城となってしまったのです。哀れな老婆の死を悼んだ土地の人々が城跡のそばに地蔵様を建てて祀ったというものです。

其の後、江戸時代の末に、台谷の名主である**山崎六郎兵衛（大六さん）**が、改めて供養のために地蔵像を作り、今の舟地蔵公園近くの位置に祀ったとされています。名前の通り、船形の台座に地蔵が鎮座しています。地蔵が船に乗っているのは、老婆の家が川向うにあったので霊が帰りやすいようにとのこと。またお地蔵様が手に持っているのは宝珠出なくダンゴだと云われています。又老婆がダンゴを売っていたのは、引地川左岸、現在の親水公園内で台地が川にせり出し狭くなった場所でダンゴクビと呼ばれた所とのこと。

壊された堰は、今の柏山稻荷神社（小字引地）の近くにあったとされています。現在、引地川はそこで砂丘列を切り、鵜沼を通過して相模湾に注いでいます。城側の武将の吉田将監が屋敷を構えて堰の管理や守備をしていました。そこを北条軍が夜襲して将監らを打ち取り、堰を切って沼の水を一気に流したとされています。但し、この堰がどんなものだったのかは明らかでなく、更に大庭城の周りに広大な沼があったかについても未だはっきりしていません。



台谷にある旧舟地蔵（伝）